

V 情報ボランティア支援のポイント

(1) 「情報ボランティア」の人材確保に当たって

1. 青少年のボランティア体験活動として「情報ボランティア」を

「子どもパソコンボランティア養成事業」のように、小学3年生でも成人のパソコン初心者に対してサポートができた。普段、年長者から教えられることがほとんどの小学生にとっては、教える立場を体験できるボランティア活動である。

成人の中に、パソコンの基礎について学びたい人は多く、青少年が持っているパソコンに関する知識・技能は、学校で学んだ知識をそのまま地域に還元しやすいものである。青少年のボランティア体験活動を考えるときに「情報ボランティア」をその選択肢として取り入れ、青少年のパソコンの知識は、大切な地域の教育力であるという視点を持つことが大切である。

2. 様々なスキルに応じて指導ができる「情報ボランティア」育成を

小学校で学習したパソコンの知識や、初級のパソコン講座を受講しただけの高齢者の人でも、「情報ボランティア」は活動が可能である。パソコンのスキルが高いことにこしたことはないが、それぞれのスキルに応じた活動をすることで、「情報ボランティア」の活動は、年齢やパソコンのスキルに関係が無く可能なボランティア活動である。

たとえば、「私だけがわからないのか」、「こんなことを質問すると笑われる」、「同じ質問なので聞きにくい」などという初心者にとっては、講座を受講していても悩みはつきない。そんなとき、あまりパソコンのスキルの高くないボランティアがそばにいてくれると、共感をしながらサポートをしてくれる。初心者にとって聞きやすい、質問しやすい人がそばにいてくれることは安心して学習が進められる要因となる。

3. 団体登録で地域に根付くボランティア活動を

「情報ボランティア養成研修」では、パソコン講座を開催するグループ演習が終了してから、「栃木県生涯学習ボランティアセンター」への登録を勧めている。個人でも団体でも登録は可能だが、数名でも有志を募りグループを結成する、団体での登録を期待している。というのは地域において、情報ボランティアの団体として認知されことで、継続的、広範な内容の活動ができるので、団体による活動と登録が望まれるのである。

4. ボランティア同士のネットワーク形成を

栃木県メディアボランティアの「パソコン相談」では、様々な質問があり、質問の中身により、ボランティア間で対応する人を割り振っている。その日の反省会では、どんな相談があり、どんな対応をしたかという情報を共有化している。「情報ボランティア」として活動を続けるときに、常にボランティアとしてスキルの向上に努め、新しい情報を得る必要がある。その情報源として、一緒にボランティア活動をする仲間が重要な役割を担っている。広範なパソコンの分野において、それぞれに得意分野を持つ人たちが共に行動することでスキルアップも望めるのである。

5. 「情報ボランティア」と活動の場をつなぐコーディネーターの養成を

「情報ボランティア」を養成・ボランティアセンター等に登録をしても、ボランティアの受け入れ先と「情報ボランティア」を繋ぐコーディネーターの存在が必要となる。そのためには、コーディネーターの養成を併せて実施していく必要がある。

総合教育センターでは、「生涯学習ボランティアコーディネートセミナー」を開催し、実際のコーディネーターをはじめとして、ボランティア活動をしている人や行政担当者、教職員など幅広い人を対象にボランティアのコーディネートについて、学習の機会を提供している。